カメルーン南東部の狩猟採集民バカにおける貨幣経済の浸透

北 西 功 一

Penetration of Cash into the Baka Hunter-gatherers in the Southeastern Cameroon

Koichi KITANISHI

(Received September 26, 2003)

1. はじめに

この論文を書くきっかけとなったのは、私がカメルーン南東部に居住するバカ（Baka）という民族の現地調査で観察した貨幣にまつわる二つの対照的な出来事である。バカは中部アフリカ熱帯雨林地帯に居住する「ピグミー」系狩猟採集民の１グループである。バカはもともと野生の動植物に多くを依存し、近隣の農耕民と関係を持ちつつ自給自足的な生活を送る狩猟採集民であったが、彼らの生活は1950年代から農耕化、定住化、貨幣経済の浸透など急速に変化してきた（Althabe, 1965）。私の興味を引いた出来事のうちの一つは、ある男性が手に入れた現金の一部を直接的な消費にまわすのではなく、生産のための投資に使ったことである。この出来事により、一部の人のみではあるものの、彼らの生産と消費に対する考え方が狩猟採集におけるそれと比べてかなり変化しつつあることを認識させられた。もう一つの出来事は、私の調査の手伝いをしていた男性が、数万 CFA フラン[1] の現金を持っていたにもかかわらず、私に1,000CFA フランの給料の前借を申し込んできたことである。彼にとって、1,000CFA フランの現金は10,000CFA フランの現金と単に量的に異なるのではなく、質的にも異なっていたのである。これは、すべての物の価値を貨幣という単位によって量的に評価していくという特徴を持つ貨幣経済が、単純にそのまま受け入れられているわけではないことを示していた。

伝統的な生態人類学的もしくは経済人類学的狩猟採集民研究は、野生の動植物資源をどのように獲得し利用しているかということに加えて、それがいかに分配されているかということを注目してきた。Leacock & Lee（1982）では、食物分配はほとんどすべての狩猟採集民に見られる特徴であるとされている。

しかし現在、野生の動植物のみに依存した「純粋な」狩猟採集民は存在しないといわれる（Headland & Reid, 1989）。むしろ、現在の狩猟採集民の経済は何らかの形で狩猟採集民以外の社会の影響を受けている。その中には、狩猟採集民社会の経済・社会的な統合に否定的な影響を与えた、例えば、食物分配などの経済的紐帯が脆弱になり生産および消費の単位が個人もしくは核家族となっていくという報告がある（Murphy & Stward, 1956）。これは狩猟採集民の経済・社会は貨幣と商品経済化に抗することができず外部社会の経済に飲み込まれてしまうという認識である。これに対して、狩猟採集民の経済・社会が主体的に貨幣経済を取り込んでいくという視点の重要性も指摘されている（Feit, 1991）。実際、いくつかの狩猟採集民社会において、食物分配は形を変えつつも依然として健在で、彼らの経済・社会関係の基礎となってい

るという場合も見られる（Peterson & Matsuyama, 1991; Wenzel, Hovelsrud & Kishigami, 2000）。バカにおいても、食物分配システムは外部社会の影響を受け変化しつつあるが、重要な役割を維持している（Kitanishi, 2000）。しかし、これらの場合でも狩猟採集民社会が貨幣経済の浸透をコントロールしているとみなすのは適切ではない（Peterson, 1991）。狩猟採集民は世界経済もしくは国家の枠組みからみると周縁部に位置していることがほとんどであり、外部からの貨幣経済の圧倒的な力に対して部分的に読み替えながら受け入れているというのが実情であると考えられ、バカの場合も例外ではない。

外部社会との接触による経済的な影響については二つの面からの分析が考えられる（Kitanishi, 2000）。一つは、彼らの経済システムの中にもともと存在した物（例えば食物など）が、外部の経済システムに取り込まれてしまうのか（たとえば現金で売買される）、それとも外部の経済活動とは一線を画したままでもともとの経済システムを維持していくのかという面である（現実はこの二つの中間もしくは妥協であるだろうが）。もう一つは新たに外部社会から入ってきた物（貨幣や工業製品など）が彼らの経済システムの中でどのように取り扱われるのかという面である。

一番目の分析についてはすでにKitanishi（2000）において詳しく述べている[2)]。本稿は二番目の視点から分析したい。つまり、バカにおける現金を介した取引、交換について詳しく見ていくことにより、彼らの経済・社会が彼らの経済にはもともと存在しなかった貨幣をどのように取り込んでいったのか、もしくは貨幣経済に取り込まれていったのか、そしてそれによって彼らの経済や社会はどのように変化したのかということを考えてみたい。当然、この変化は現在も進行中であり、今後とも調査を継続していく必要がある。

2. 調査地と経済的背景

中部アフリカ熱帯雨林地帯にはムブティ（Mbuti）やアカ（Aka）などの「ピグミー」系狩猟採集民がいくつか存在するが、バカはその1グループである（Bahuchet, 1992）。彼らはカメルーン南東部とコンゴ共和国北西部に居住し、その人口は3-40,000人程度と推測される（Joiris, 1993）。彼らはウバンギアン（Oubanguian）系の言語を使用している（Bahuchet, 1992）。カメルーン南東部にはバカに加えてバントゥ（Bantu）系の言語を話すバペレ（Bakpele）、コナベンベ（Konabembe）、ボマン（Mbomam）やウバンギアン系の言語を話すバンガンドゥ（Bangandou）の人々が存在する。

1950年代以前、カメルーン南東部のバカが外部の人たちと接触することは少なかった。バカが交渉を持つバカ以外の人は主として近隣の農耕民、特に緊密な関係を持つ特定の農耕民であった。バカは農耕民の農作業を手伝い、また森の産物を農耕民にもたらし、農耕民はその見返りとして農作物や鉄製品をバカに与えていた（Althabe, 1965）。この時点でバカが現金を用いることは皆無に近かったと想像される。

Althabe（1965）は1950年代から大きく変化し始めたバカの生活を詳細に記述している。近隣の農耕民との関係の変化や政府の農耕化、定住化政策の結果、バカは森から道沿いに出てきて集落を作り自らの畑を持つようになった。それ以前、彼らは特定の緊密な関係を持つ農耕民とだけ接触を持っていたが、次第に多くの農耕民と接触するようになり、またこの頃、近隣の農耕民はカカオとコーヒーを換金作物として栽培しはじめ、その畑で働くバカも出てきた。このときに見返りとしてバカは現金やヨーロッパ産の品物を手に入れた。また、カメルーン北部をホームランドとするハウサ（Hausa）の商人がこの地域で定期市を開き、バカは100km以上離

れた場所からでも歩いてやってきて、石鹸や化粧クリーム、エナメルの皿などを購入した。それほどヨーロッパ産の品物に惹かれていたのである。しかし、バカの中で現金を計算できる(10枚の10フラン紙幣が1枚の100フラン紙幣と同じ価値を持っていることを理解できる)人は各集落に1、2名しかおらず、他の人たちは質的な価値を持つ物として現金を理解していた。また、このような現金はヨーロッパ産の品物の購入と婚資として使われたのみで、彼ら自身が生産する食料を売買することはなかった。婚資としての現金の使用は後で詳しく分析する。

バカが現金を身近な物として利用するようになったのは木材伐採会社進出の影響が大きいと思われる。伐採会社は1970年代からカメルーン南東部各地に進出し、商品価値のある木を切り尽くして他の場所に移動するということを繰り返している(市川, 2002)。ここで私の主な調査地であるドンゴ村を例に伐採会社の進出と撤退の経緯を述べておこう。ドンゴ村(Village de Ndongo)は行政的には東部州ブンバ・ゴコ県モルンドゥ郡(Sous-préfecture de Moloundou, Départment de Boumba et Ngoko, Province de l'Est)に属し、郡都のモルンドゥから見るとジャー(Dja)川最奥の村にあたる(北西, 2002)。ドンゴ村はバペレ(Bakpele)というバントゥAグループの言語を話す農耕民によって形成された村で、現在のバペレの人口は70人程度である。ドンゴ村周辺には合計5つのバカの定住集落があり、その総人口は250人程度にのぼる(林, 2000)。

1973年、この村に木材伐採会社が進出し貯木場が作られた(林, 2000)。これに伴い、トラックが通れる道路網が整備され、人と物の行き来が激しくなった。カメルーンの首都ヤウンデ(Yaoundé)や大西洋に面した港町で商業の中心地であるドゥアラ(Douala)からも労働者がやってきて住みついた。カメルーン北部からは商人のハウサがやってきて、日用雑貨の販売をおこなった。近隣の村やジャー川をはさむ隣国のコンゴからも多数の人が移住してきた。その結果、ドンゴ村には今の何倍もの人が住むようになった。

多数の労働者にはそれまでの現地の常識に比べると膨大な額の給料が支払われ、その現金がさまざまな形で消費された。労働者は農作物やジャー川で漁獲される魚、森で狩猟される獣肉などを食料として購入した。魚や農作物は主としてバペレが供給したが、獣肉は直接もしくは間接的にバカが供給したと思われる。バカの一部も木材伐採会社に雇われていた。バカが任された仕事は最も給料の安いものであったが、それでも月に20,000－40,000CFAフラン[3]というかなりの額をもらっていたという。

1982年に木材伐採会社は撤退し(林, 2000)、それに伴い外部からやってきた労働者のほとんどは村に離れることになる。しかし、伐採会社で働いてお金を稼いだ人や商売でお金をもうけたハウサの中には、そのお金をカカオ畑に投資した人がいた。彼らは他の農耕民やバカの所有するカカオ畑を現金で購入したり、バカを雇って新たにカカオ畑を開いたのである。そのカカオ畑の維持にもバカの労働力を利用した。また、バカ自身もすでにカカオを栽培するようになっており、そのカカオを売って現金を獲得していた。

このような歴史的経緯の中で、ドンゴ村周辺のバカはかなり貨幣に慣れ親しんできた。ただし、彼らが貨幣を蓄えることやそれを使うことなどに対する考え方は通常の貨幣経済におけるものとは異なる部分もある。次章では1999年2－3月と2000年8月10月におこなわれた現地調査において観察された貨幣を介した交換を分析することによって、この点を見てみたい。

3. 現金を介した交換

(1) 見返りを求めない贈与

現金をそのままの形で純粋に贈与するということは稀である。この点は食物や酒、タバコなどとかなり異なる。食物分配は、以前に比べると量的に減少し範囲も狭くなっているが、日常的に見られる（Kitanishi, 2000）。

見返りを求めない贈与は、親子、兄弟姉妹などの近親者の間でおこなわれることがある。親が子供のために必要なお金を出してあげたり、子供が何らかの形でお金を稼いできたときにそのお金を親に提供したりする。また、近親者がどうしてもお金が必要な場合に融通することが見られる。

(2) バカの労働力による現金の入手

現在、バカの労働力は少なくともバカ以外の人に対して商品となっている。バカは頻繁に農耕民やハウサの畑で農作業をおこなう[4]。一般に農耕民の場合は一日を単位にバカの男女を雇う。焼畑の伐開や除草が主な仕事である。作業の見返りは1日250CFAフランと決まっている。ただし、支払方法はいろいろある。仕事の後で現金を渡すこともあるが、最も頻繁に見られるのは250CFAフラン分の自家製蒸留酒（500cc）を渡す場合である。また、あらかじめ農耕民が農作業を見返りとしてバカに酒を飲ませ、後日バカに農作業を要求する場合もある。仕事の後で現金を渡す場合でもそのお金ですぐに酒を買ってしまう場合が多い。3月の焼畑の伐採時期には毎朝数名の農耕民がバカの集落を訪れ、顔見知りのバカに畑仕事を依頼したり、以前飲ませた酒の見返りとして労働を要求したりする。バカはこの依頼や要求に対して、最初は嫌がる様子を見せることもあるが、結局は押し切られて応じる場合が多い。すでに飲んだ酒の見返りとして働くのが嫌な場合は、朝早くから集落を離れて別の集落や森もしくは自分の畑などに逃げる。この場合、農耕民は逃げたバカに対して怒りをあらわにするが実際にはどうしようもなく、翌朝また来るしかない。

ハウサの畑における作業は１日が単位の場合もあるが数十日もしくは２、３ヶ月が単位のこともある。１日が単位の場合は農耕民と同じく賃金は250CFAフランである。最も大きな畑を持つハウサの世帯では酒を造っていないので、現金を渡すことが多い。ただし、そこは日用雑貨を売る商店を開いており、250CFAフラン分の商品（米、サルディーンの缶詰、塩、食用油など）を直接渡すことや、バカが支払われた現金の全部もしくは一部をその場で商品の購入にあてることも多い。

ハウサが長期間にわたりバカを雇う場合では、毎年９－12月のカカオの収穫期にバカが雇われ、男性には30,000～100,000CFAフラン、女性には15,000~30,000CFAフランの賃金がまとめて支払われる（林，2000）。給料の支払いはハウサがカカオを買い付け人に売った後で支払われ、金額は働きとその年のカカオの価格によって決まる（林、分藤私信）。その他の時期にもまとまった労働が見られることがある。見返りとしては現金もしくは服、布、サンダルなどバカにとっては高価な商品が与えられる。このような長期間の労働を担うのは若者である。

バカは農耕民とともに漁撈キャンプに入り、農耕民の漁撈活動を手伝うことがある。そのときは給料の支払いを受けるとともに漁獲物の一部をもらい、それを売る（林、私信）。

外部からやってきた人がバカを雇うことがある。バカの男性は狩猟目的でやってきた外国人の案内をすることが稀にあり、その場合の給料は交渉により決まる。最も頻繁なのは、日本人

の調査者によるバカの雇用であろう。2000年の調査時に私は継続的に2～3人のバカを畑の計測と日常生活の雑用のために雇っていた。賃金は1日500CFAフランであった。農耕民やハウサの農作業の倍の賃金である。これは、私自身が1日250CFAフランという金額を一日の労働の対価としては安すぎると感じていたこともあるが、最も重要な理由はバカに確実に働いてもらうためである。つまり、勝手に仕事を休むことがあるバカを仕事にひきつけるためといえる。支払いは原則として一ヶ月単位であるが、実際は前借りをすることが多く、雇われているバカがお金を必要としたときにその分を与え、残りを月ごとに支払うという形を取っている。

このように現金を得る場合には数百CFAフランを1日単位で手に入れる場合と、数千もしくは数万CFAフランを数十日間の労働の結果手に入れる場合がある。後で述べるが、手に入れる金額によって現金の使い方は異なる。

(3) 物との交換による現金の入手

バカはさまざまな森の産物および農作物を現金と交換する。まず、森の産物について見てみよう。

バカが販売する森の産物で最も重要なのは獣肉である。現在、バカは鉄製のワイヤーを使った跳ね罠猟や銃猟をおこなっている（林, 2000）。集落に滞在している場合、跳ね罠は畑の周りなどに仕掛けられ、その獲物としては中小型のダイカーが多い。森に滞在して罠を仕掛けることもある。この場合はブッシュピッグなどの大きな獲物が獲れることがある。

一部のバカの男性は農耕民から銃猟を依頼され、銃と散弾を受け取り、狩猟に出かける。この場合はサルやダイカー、ブッシュピッグなどをしとめる。獲物は銃と散弾の持ち主である農耕民のものとなるがその一部がハンターに分けられる。最近、他の地域の伐採会社で働いていたバカが散弾銃を購入した。バカ自身が散弾を購入しこの散弾銃を借りて銃猟に出かけることもある。この場合は散弾の持ち主が獲物の所有者となり、銃の所有者には肉の一部を与える。

獣肉は一部もしくは全部が無償で近くに住む近親者や妻の両親などに分配されることもあるが、大部分は販売される。購入者はハウサや私のような滞在者、肉が売りに出たときにたまたま現金を持っているバカなどで、現金を持つ人は購入したがっている場合が多い。バカとハウサ（と私）の獣肉に対する嗜好は強く、また定住集落では獲物が多くないので、肉は簡単に売れる。

2000年現在、販売される肉の単位が変化しつつある。これまでの販売の単位は、ブルーダイカーなどの小型のダイカー（体重5 kg程度）では丸ごともしくは半身、中型ダイカー（体重15-25kg程度）は前脚もしくは後脚一本、ブッシュピッグは前脚、後脚、腰の部分などであり、値段は1,000CFAフラン以上するのが一般的であった。売り手は小型の獲物なら買ってくれそうな人のところに持っていき交渉する。大きな獲物の場合は解体して人が買いに来るのを待つ。

しかし、最近では、肉を小さな塊に切り分け、一塊を50CFAフランもしくは100CFAフランで販売している。切り分けた肉を大きな鍋の蓋など載せ、いくつかのバカの集落をまわる。その時に「Morceau, 50（100）フラン」と言いながら、肉がまわりのバカに見えるように歩いていく。Morceauはフランス語で一塊という意味である。それを見たバカは欲望をそそられ、100CFAフラン硬貨などの小銭を持っている場合はすぐに購入してしまう。小さな塊で売った場合のほうが肉を切ったり、集落を売り歩いたりなど手間がかかるが、大きな単位で売るよりも1.5～2倍程度の収入になる。この肉の一塊にはフランス語が使われていることからわかる

ように、肉を小さい多数の塊に切り分けることはこれまでおこなわれていなかったと考えられる。獣肉の分配では最終的に小さな塊が分配されることはあるが、最初から多数の小さな塊に切り分け、それを多くの人に分けるということはしない。この販売方法はモルンドゥなどの町における肉の販売方法を、バカが直接か，農耕民を経由して真似たものであろう。このように定住集落では肉は分配される物というよりも販売される物となりつつあり、さらに、販売者はより多くの現金を手に入れようと努力していることが窺える。

野生植物ではイルヴィンギア属（*Irvingia gabonensis* など）のナッツから作った脂の塊が現金収入源としてあげられる。2000年はバカの居住地域を含むカメルーン南部全域でイルヴィンギアの木が大量に実をつけ、ドンゴ村付近のバカの多くはナッツ採集のために２、３ヶ月間森に滞在した。採集したナッツを乾燥し、炒って、搗いたものを型に入れると塊ができる。これは保存が可能で、削って煮込み料理に調味油として入れる。農耕民が自家消費用としてバカから購入したり、商人が購入し町で転売する。価格はバカの言い値では、直径28cm 高さ20cm の円柱形のものが10,000CFA フラン、直径29cm 高さ37cm の円柱形のものが25,000CFA フランということであった。実際はこれよりかなり安いと思われる。これは毎年大量に採集されるものではないが、数年に一度数千もしくは数万 CFA フランの現金収入源になる。

野生の食用の葉（*Gnetum* spp.）が採集されて農耕民に販売されることがある（林，私信）。また、アフリカ・コショウ（*Piper guineense*）の実を子供が採集して、ハウサのところに持っていく。値段はとても安く、大きな鍋いっぱいで100CFA フランとキャンディが１つであった。子供のこづかい稼ぎといったものであろう。ハウサはこれを町で転売していると思われる。

この他の森の産物で販売される可能性があるものはいくつかあるが、売買は観察されなかった。野生動植物には季節的な変動に加え年による変動が大きいものが多く、その観察には数年間の継続的な調査が必要である。特に、販売されている可能性が高いものとしてイモムシとハチミツが考えられる。これらは当たり年には大量に採集され、保存もある程度可能である。

バカ自身の畑で収穫される農作物も販売される。その中で最も重要な物はカカオである。ドンゴのバカにとって、カカオは現金収入のみを目的とする唯一の作物である。ドンゴ村のバカの成人男性の半分程度はカカオ畑を所有している（林、私信）。バカの中でまとまった量のカカオを生産するのは35歳以上の壮年層で、20代半ばの若者の生産量は少ない。袋数（乾燥カカオ80kg）で換算すると、多い人で６～８袋、少ない人は１～２袋である（林，2000）。

林（2000）では、バカのカカオの売却値段は1袋12,000～24,000CFA フランであるとされている。ドンゴ村では毎年12月にカカオの買い付けがおこなわれる。2000年の公式レートは１袋37,500CFA フランであり、これはカカオの国際市場の動向によって年ごとに変動する。バカのカカオの値段が安いのは、12月の公式なマーケットまで待てずに早い段階でハウサに売ってしまうためである。農耕民でも９月に売る場合は１袋25,000CFA フランであるという。公式なマーケットが開かれるまで自分の手元にとっておいたほうが最終的には高い値段で売れるのだが、バカはできるだけ早く現金が欲しいため、そして備蓄するのが面倒なために、カカオを収穫し乾燥させるとすぐにハウサに売ってしまう。ハウサはそのカカオを公式なマーケットの開催まで管理してそこで自分の畑から収穫したカカオといっしょに売却し、買い付け価格と販売価格の差を利益として手に入れている。

その他の農作物では料理用バナナが売買されることがある。私が自分用にバナナを買いたいと雇っているバカに言うと、バナナを持っているバカを探してくれる。価格は１果掌100CFA フランである。料理用バナナの売買は稀にバカ同士でおこなわれることがある。その価格もほ

ぼ同じである。

一度だけバカの男性が収穫してきたアブラヤシの実を販売したのを観察した。この男性は夫婦でアブラヤシを収穫して、その一部をまわりに住む人たちに分配したが、残りをおよそ13個の実からなる塊（130g）に分け、塊５つを100CFAフランで販売した。買ったのもやはりまわりに住む二人のバカであった。分ける相手と売る相手の違いがどこにあるのかはっきりとしないが、買った二人のバカは結婚しているが若い世代のバカであり、ハウサの農作業の手伝いなどで金回りが良かったのかもしれない。

一部のバカは鶏を飼っており、これを売ることもある。ただし、バカ同士で売買することはなく、また彼ら自身でもほとんど食べることはない。買い手は私などの外部者である。一羽1,000CFAフラン程度である。

バカは農耕民に対して薬を与え病気を治療することにより現金を見返りとしてもらうことがある。ある朝、農耕民の女性が赤ちゃんをバカの男性のところに連れてきた。赤ちゃんはお腹の病気のようであり、そのバカの男性に治療を依頼した。男性は赤ちゃんのお腹に傷をつけ薬草の煤をすり込んだ。もし、赤ちゃんの病気が治ったら農耕民の女性はバカの男性に500CFAフランを支払うと言っていた。また、林（私信）によると、ハウサにバカの男性が薬を持って行き、5,000CFAフランをもらったことがあるという。バカの中には薬となる植物を良く知っている人が存在する。また、農耕民にとってバカは自分たちよりも森に近い存在であり、森の「力」を備えたものであると考えられている。これは薬という物と治療行為という労働を金銭と交換したというよりも、そのバカの男性が備えている森に関する知識と森の「力」を、それを持たない農耕民に金銭を見返りとして与えたということであろう。

最後に重要な収入源として婚資がある。これについては現金の用途のところで述べる。

(4) 現金の用途

バカは現金をどのような用途に当てているのか見てみよう。まず数百CFAフラン程度のお金を手にした場合を取り上げる。

バカが最もよく購入するのは農耕民が作る蒸留酒である。バカは小銭を手に入れるとすぐに酒を買ってしまう。それをまわりのバカと飲むのである。食物の分配は狩猟採集時代よりもかなり減少していると思われるが、酒の分配は依然として盛んである。自分自身が飲みたいという欲望とまわりから酒を買うようにという圧力が酒の購入に走らせている[5)]。

その他に農耕民から購入する物としては、魚、獣肉、大麻、灯油などがある。農耕民は魚網を持っており、それをジャー川に仕掛けている。大きな魚が捕れるとハウサなどに販売するが、手持ちの現金があるバカや私に雇われていて給料の前借りができるバカはそれを購入することがある。獣肉は農耕民とバカから購入する。灯油は１リットル500CFAフラン程度で販売されている。ドンゴ村に電気はなく、バカの大部分は灯油ランプを持っている。農耕民が町に出たときに購入し、村に持って帰り、村で転売して利益をあげている。

ドンゴ村ではハウサが商店を開いており、そこではさまざまな日用雑貨が販売されている。その中でバカが最も頻繁に購入する物は塩とタバコであろう。タバコは４本100CFAフラン（町の倍以上の値段）で、塩は小分けされて売られており小銭で購入できる。他に米や食用油を購入することもある（林，私信）。食料品関係としては砂糖、トマトの缶詰、キャンディ、インスタントコーヒー、ティーバックなども売られているが、日常的には購入しない。散弾銃の弾丸（650CFAフラン）を購入することもある。

バカが数百CFAフランの現金を貯めて数千、数万CFAフランとし、それで高価な物を買うということはまずない。お金はすぐに物（酒の場合が最も多い）に変わってしまうのである。

カカオの販売やハウサにおける長期間の農作業の報酬、私などの外部の人に長期間雇われるなどした時には数千もしくは数万CFAフランというバカにとっては多額の現金を手に入れることがある。この場合、服、布、サンダル、鍋、山刀、ラジカセなどの高価な製品を購入することがある。特に、カカオの買い上げ時期には町からドンゴ村に商人が多数訪れ、バカはカカオの売却によって手にした現金を使う（林, 2000）。ただし、この時期に調査をおこなっていないのでその詳細は不明である。

多額の現金を手に入れた場合、物の購入以外に重要なお金の使い道がある。それは婚資の支払いである。婚資は一度だけ渡すものではなく、数万CFAフランのまとまった現金を手に入れるたびに何回も渡す。あるバカの男性は婚資の総額が200,000CFAフランであると言っていたが、実際には総額は決まっていない[6]。妻を得た男性はその妻の親族に対して払い切ることのできない負債を一生（離婚しない限り）負っているようなものである。

4. 日本人研究者が払ったお金の行方

私がドンゴ村に入ったとき、すでに別の日本人研究者が調査をしており、彼はバカの男性を二名雇っていた。彼は私よりも先に調査を終えて調査地を去ったが、そのときに雇っていたバカにそれぞれ20,000CFAフラン（10,000CFAフラン札二枚）を給料として渡した。その使い道が本稿の冒頭で述べた事例である。ここでは二人（A氏、B氏）のこの現金にまつわる話を述べる。

(1) 婚資としての貨幣

A氏は、彼の妻の父親にすでに25,000CFAフランを婚資として支払っていたが、妻の父親はそれに満足しておらず、彼はその給料を婚資の支払いに充てることにした。しかし、妻の父親はそのとき森に入っており、集落に帰ってくるまで彼が現金を保管していた。ある日、A氏は私に1,000CFAフランの給料の前借りを申し込んだ。私は、「前にもらった給料があるのだからそれを使えばいいのではないか。」と言ったが、彼は納得せず、「あのお金は婚資のために保管してあるのだ。」の一点張りで、結局私は1,000CFAフランを渡した。私は、前借りで渡した1,000CFAフランも彼が婚資のために保管している20,000CFAフランも同じお金であり、後で彼は私から給料を手に入れるのだから、どうしてこのようなことをするのか腑に落ちなかった。

A氏の行為を理解できたのは、私が帰国後Althabe（1965）を読んだときである。この論文には貨幣が婚資として使用されるようになったときの状況が記されている。1950年代には貨幣やヨーロッパ産の物がバカの経済に導入され始め、これらの物が婚資となっていった。ただし、貨幣の中で婚資として使用されたのは当時の高額紙幣であった1,000フラン札であり、小額紙幣や硬貨は市場で石鹸などのヨーロッパ産の日用品の購入に充てられた。婚資に使われる紙幣は、普通の売買に使われる貨幣と同一視することはできず、質的に違うものであり、異なった流通圏を形成していた。娘の代わりに1,000フラン札を受け取った父親は、息子もしくは彼自身が妻を手に入れるためにしかその紙幣を使うことはできない。高額紙幣では日常的な買い物をおこなわなかったのである。

このような貨幣の額による質的な違いが現在でも維持されているとすれば、A氏の行為は理解できる。A氏の認識では、1,000CFAフラン札10枚が10,000CFAフラン札1枚と同じ価値を持っているのではなく、10,000CFAフラン札は婚資であり、1,000CFAフラン札は日常的な買い

物に使うというように両者の間には質的な違いが存在する。だから、彼は私に1,000CFAフランの前借りを要求したのである。

貨幣の中に二つの交換可能性によるカテゴリーが存在するということの起源を考えてみたい。貨幣が導入される以前の婚資は何であっただろうか。Althabe (1965) は婚資婚自身がバカの農耕化と定住化の結果生まれたものであるとしている。彼は、それまでの遊動生活においてバカは最小限の物しか所有せず、それらの物には価値はなかったが、定住化とともに物を持つことが可能になり、その時点でヨーロッパ産の物が彼らにとって特別な価値を持ち、女性と交換されるようになったと言う。確かに、野生の動植物を材料として作られた物は自由に手に入れることができ、これを婚資として用いることは不可能である。ただし、Althabe (1965) はそれ以前の結婚の形態を記していない。コンゴ民主共和国東部のムブティ・ピグミーで見られる姉妹交換婚（寺嶋, 1996）は存在しただろう。しかし、バカ自身に尋ねてみると、40年前の結婚では現金に加え、槍の穂先や斧の刃、山刀、服を婚資として渡していたと言う。

中央アフリカ共和国南部からコンゴ共和国北東部に居住するアカ・ピグミーでは、以前から鉄製品が婚資として用いられている (Bahuchet, 1985)。私が1990年代前半にアカに現金がほとんど流通していない地域で調査をおこなったとき、アカが婚資としていたのは鉄製品である槍の穂先と斧の刃、狩猟用の網であった[7]。アカは彼ら自身で鉄を作ることができず、農耕民から鉄製品を手に入れている。狩猟用の網は製作に大変手間のかかる物である。婚資となっている物はアカにとって貴重な物で簡単に獲得もしくは製作できる物ではない。この三つの物は頻繁に贈与もしくは交換されている。ただし、その交換はこの三つの物と女性の間だけでおこなわれており、他の物、例えば食物と交換されることはない。つまり、すべての物がすべての物と交換できるのではなく、物には交換可能性によるカテゴリーが存在する。このカテゴリー間では価値が量的にではなく質的に異なるのである。

これらのことから考えると、バカにおいては婚資が鉄製品から高額紙幣へと変化していったが[8]、婚資となる物が他の物と異なる交換可能性によるカテゴリーに含まれるということは維持されたということになる。価値評価の基準となること、つまり、物を量的な価値として評価することが私たちの経済における貨幣の機能の一つである。バカに貨幣が導入されてから50年程度経過しているが、貨幣そのものさえも貨幣経済化していない面があると言える。

ただし、現在高額貨幣の流通は婚資としての使用だけに閉じているわけではない。高額紙幣もいつかは商品購入のために使われ、婚資としての流通圏から出て行く。交換可能性によるカテゴリーは漠然とした形でバカの人々に共有されているものであるため、商品購入を厳しく規制するものではない。特にカカオの買い付け時期にはドンゴ村に町から商人がやってきて、バカはいろんな物を購入する。またドンゴ村にはハウサの商人が常時存在する。しかし、バカ同士もしくは農耕民との間で高額紙幣を使って日常生活用品を売買することは不可能に近い。なぜならお釣りを支払うことができないからである。現実的にはドンゴ村で流通している小額紙幣と硬貨の量が少ないことが高額紙幣の婚資以外への流通の歯止めになっていると思われる。町近くに居住するバカではこのような交換可能性によるカテゴリーはすでになくなっているかもしれない。

(2) バカによるバカの労働力の商品化

B氏にも給料の使い道を尋ねたところ、やはり婚資に使うという答えが返ってきた。しばらくしてB氏を見かけたとき、彼は大量の大麻を購入していた。大麻は100CFAフランの小さな

包を単位として販売されているが、彼はそれを農耕民から30包以上購入した。自分で吸うためなら一包、多くても二、三包買うだけである。彼に尋ねると、「これを他のバカに与えて、自分の焼畑やカカオ畑の草刈りをしてもらう。」と答えた。この答えに私は驚いた。

私はそれまでバカは消費のための交換手段として貨幣を使用すると考えていた。つまり、貨幣を自分が持っていない使用価値を持つ商品と交換し、その交換で手に入れた物を消費するということである。つまり、「商品（森の産物や労働力）→貨幣→商品（酒、タバコ、布）」という交換の流れである。しかし、B氏は貨幣を次の生産へ投入しようとしたのである。ここで、B氏が、大麻で購入した労働力による農作業から得られるカカオの利益が、労働力の購入にかかった費用より大きいと認識しているとしたら、彼は貨幣を資本として用いたことになる。彼がここまで認識しているのかは不明であるが、少なくとも現時点での直接的な消費ではなく将来の収穫を目指して貨幣を使用しており、これは資本への第一歩となるであろう[9]。

バカの労働力を農耕民やハウサ、私を含む外部者が商品として取り扱うことはこれまで見られたが、バカが他のバカの労働力を商品化することは上であげた例を除いて見ていない。ドンゴ村におけるバカ同士での農作業の商品化は、農作業における結いを起源としているのかもしれない。バカの男性は焼畑の伐採作業において結いを結成することがある。5～10人程度でグループを作り、一日ごとにメンバー全員でそれぞれの焼畑の伐採をおこなうのである。これにより、他のバカの畑で働くということに親しんでいく。林（私信）によると、結いのメンバーであった若いバカの男性が自分の畑の伐採の作業時に他のメンバーに大麻を分けたと言う。この若いバカは大麻を分けることによって、いつもよりも広い面積を伐採してもらうことを期待していた。バカの多くは大麻を非常に好んでおり、伐採作業中に吸うと疲れを忘れて仕事がはかどる。この点からすると労働力と大麻の純粋な交換というわけではないが、その前段階と言えるだろう。B氏の行為はここから労働力の商品化に一歩進んだものであるとみなせる。B氏のこの行為は近隣の農耕民やハウサを参考にしており、彼の発明というわけではないと思われる。

B氏の試みが結局どうなったのかは、調査期間が終わってしまったためわからなかった。うまくいかなかった可能性もあると思われる。バカにおいて大麻は酒やタバコと並んで分配すべき物である。タバコや大麻はまわりにいる人たちに回してみんなで吸う。一包100CFA分という大量の大麻を分配するということはこれまでなかったことであるが、大麻を受け取ったバカがそれを自分の労働と交換される物と考えるか、分配（見返りを与える必要はない）と考えるかはかなり微妙な問題であろう。

考 察

(1) 即時的、直接的な生産・消費と貨幣

バカの経済に貨幣が導入されてから50年程度が経過した。最初は、何らかの形で手に入れた現金をヨーロッパ産の物と交換する、もしくは高額紙幣を婚資として使用していた。現在ではバカ以外の人たちと貨幣を介してさまざまな物を交換しているだけではなく、バカどうしでもいくつかの物が売買されている。

狩猟採集民の経済活動の特徴の一つは、一日が生産と消費の単位となる場合が多いことである（Woodburn, 1982）[10]。自らの畑で農耕をするようになって彼らの生産と消費の一部は数ヶ月もしくは数年を単位とするように変化したが、彼らの農耕は依然として狩猟採集活動における時間の枠組みの影響を強く受けている（北西，2002）。

彼らの現金にまつわる経済活動もこの一日を単位とする生産と消費の影響を強く受けており、目の前の欲望に忠実に従い、将来のことはあまり考えないという即時的、直接的消費の傾向を持っている。例えばバカが畑仕事をして現金を手に入れるとすぐに酒を買ってしまうことや、カカオを公式なマーケットの開催まで待てず安い値段でハウサに売ってしまうこと、日本人に雇われている場合に給料の前借りをおこなうことなどがその例である。そのため、彼らは数百 CFA フランの小銭を数千もしくは数万 CFA フランとなるまで貯めて高価な物を買ったりはしない。高価な物を買うのは一度に数千、数万 CFA フランを手に入れたときのみである。

しかし、バカの間では将来を見越した生産や労働も徐々に見られるようになってきている。カカオ栽培を始めたこともその一例である。カカオ栽培は労働の蓄積が大きな利益を生み出す。苗の植え付けは数年先の、除草は数ヶ月先の利益を考慮しておこなっている。また、農耕民の畑での農作業では一日単位での仕事が多いのに対して、ハウサのカカオ畑での農作業では数ヶ月を単位とした作業をおこない、数万 CFA フランの報酬を得ることもある。

先に挙げた事例で、B氏は貨幣を将来のために利用しようとした。B氏はドンゴ村ではかなり特殊なバカである。彼は小学5年生を修了しており（この周辺では彼のみ）、モルンドゥのカトリック伝道団からドンゴ村のバカの小学校教育の世話を委託されている（北西，印刷中）など、バカ外部の社会に慣れ親しんでいる人である。調査時においてこのような使い方をする人はB氏しかいなかった。彼が突破口を開いて新しい経済の仕組みが定着するのか、それとも他の人が従わずに彼の試みは失敗するのかを今後見ていきたい。

⑵　貨幣経済、分配、平等

他の狩猟採集民社会では、貨幣経済導入に伴って、個々の家族の経済的な重要性が増し家族間での競争が起きる、生産の単位が集団から個人もしくは核家族へと変化する、私有財産化が起きるといったことが指摘されている（Murphy & Steward, 1956; Gomes, 1991）。それと並行して、これまで分配されていた物（食物など）が販売されるため、分配が減少することも報告されている（Peterson, 1991）。例えば、ムブティ・ピグミーでは網猟で得られる肉の交易が盛んで森のキャンプにまで交易人がやってきて肉を購入する。その結果、分配にまわされる肉の量が減少し、特にキャンプ全体で獲物が少なかった日には肉を分配するか売却するかをめぐりキャンプ内に緊張が生じる。また、以前は男性がキャンプの中心でいっしょに食事をしていたが、家族ごとに食事をするように変化した（Ichikawa, 1991）。

バカにおいても分配をめぐる葛藤が生じている。A氏は「森のキャンプなら肉を分けてくれるけれども、村では誰も肉を分けてくれない。森は良い[11]。」と嘆き、また別のバカの男性はC氏から肉を分けてくれと言われたが、「前にお前が肉を持っていたときに自分に分けてくれなかったので、お前には分けない。」と言って分配を断った（また、注５参照）。分配と売買の葛藤は、物と社会関係の二つを組み合わせて考える必要がある。つまり、何が分配される物で何が売買される物かと、誰に分配して誰に販売するのかである。これはかなり複雑な問題で、バカ自身、きちんと整理できているようには思えない。先にあげたアブラヤシの実の例はその典型であろう。

貨幣は多くの人との物を介した交渉を可能にするが、物の贈与のように人間関係に影響を与えることはなく、人間関係を排除した物の交換となる。バカ同士で肉が売買される場合も、誰でもよいから買ってくれる人との交換を目指している。狩猟採集民における食物分配はキャンプ内における人間関係を形成、維持していくために重要である（北西，1997;北西，2001）が、

分配の減少は居住集団内の社会関係に何らかの影響を与える可能性がある。

狩猟採集民社会の特徴の一つに経済・社会的平等があり、特に経済的平等は分配によって支えられていると言われてきた（市川, 1991）。しかし、現在、バカにおいて大きな経済的不平等が生じているようには見えない。いくつかの狩猟採集民社会において経済的不平等の発生が報告されているが（Peterson & Matsuyama, 1991）、貨幣の流入そのものが不平等の直接的な原因となっているわけではない。マレーシアのセマイにおいては村長が果樹販売の手数料を村人から徴収しており、以前は村長が村の宴会を開いてこれを村人全員に還元していたが、現在、２、３の村長は手数料を蓄積し財を成している（Gomes, 1991）。この社会では不平等が生まれつつあるが、もともと存在したある社会的な仕組みの機能が、経済・社会の変化（貨幣経済の導入を含む）に伴って、不平等を支えるものへと変化したのである。現在、バカにはそのような仕組みは見当たらない。

その他に狩猟採集民社会に不平等が発達するとしたら、小さな不平等がさらなる大きな不平等を生み出す仕組み（正のフィードバック）が存在する場合であろう。狩猟採集民の経済的平等は逆に生じた不平等を小さくしてしまう負のフィードバックが働く仕組みによっている。食物分配がその典型である。現在、バカにおける最も大きな収入源は自らの畑におけるカカオ栽培とハウサや農耕民のカカオ畑での農作業の報酬であり、これには個人差がある（林, 2000）ことから、ドンゴ村のバカにおいて現金収入は明らかに平等でない[12]。

バカにはこの収入の差を解消する役割を（少なくとも結果として）果たしているものが存在する。それは婚資である。経済的不平等がもっとも顕著に現れるのが高額紙幣であり、それが通常の流通に回されることが抑制されている。また、婚資は厳密に金額が決まっておらず、たくさんの現金を得たときに支払うものであり、そのため高額紙幣を蓄積することはできない。このように、バカは貨幣を彼らの経済に取り込んだことによって経済的平等をある程度維持していると言える。

しかし、不平等の正のフィードバックが動き出す芽がないわけではない。それはＢ氏によるバカの労働力の商品化の試みに見られる。これが成功して頻度が増し、さらにバカが貨幣を資本として投資することを理解するなら、バカによるバカの労働力の搾取が生じることになる。ただし、現在、多くのバカが自分のカカオ畑を持っており、また一次林に新たなカカオ畑を開くことも可能であるので、バカが労働力以外何も持たない労働者となるとは思われない。その可能性があるのは土地制度が変化したときであろう。

おわりに

バカが貨幣を使用するようになってから50年程度が経過している。婚資の例が示すように、バカの経済は単に貨幣経済に飲み込まれてしまったわけではない。これまで彼らの経済を支えてきた分配システムや、即時的、直接的な生産・消費という仕組みは変化を被りながらも、維持されている（Kitanishi, 2000；北西, 2002）。とはいえ、彼らは貨幣経済と一線を画した自立的な経済を営んでいるわけでもない。貨幣経済と折り合いをつけながら、時には葛藤をしながら付き合っている。社会・経済における変化は今後とも進んでいくだろう。本稿ではほとんど触れることができなかったが、森のキャンプでの生活は定住集落における生活とかなり異なっている。森のキャンプでの活動は罠や銃による獣肉の獲得や野生のナッツの採集というように商品生産を目指した面を持ちつつも、食物分配が非常に盛んであるなどより緊密な人間関係が見られる。単純に現金収入に走るなら、村でカカオ栽培や農作業の手伝いなどに集中したほう

が良いように思われるのだがそうはなっていない。彼らは依然として狩猟採集民であろうとしているのではないだろうか。

謝　辞

本研究は文部省科学研究補助金(生活環境としてのアフリカ熱帯雨林に関する人類学的研究、課題番号12371004）によっておこなわれた調査をもとにしている。研究代表者である京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の市川光雄教授には調査隊に加えていただき、また調査のアレンジなどでお世話になった。調査許可の取得にあたってはカメルーン科学技術研究省のタンチュー氏とシェ氏にご助力いただいた。インフォーマントであるガスパール・メナタ氏、サクー氏、ラポ・ヨンボ氏をはじめとするドンゴ村のバカのみなさんは私の生活を支えていただくとともに、彼らの経済に関するさまざまな情報を与えていただいた。また、ピグミー研究会ではこの論文の草稿を発表させていただき、参加者であった京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の木村大治助教授、分藤大翼氏、富山大学人文学部の都留泰作助教授、総合研究大学院大学先導科学研究科の林耕次氏からは多くの有益なコメントをいただいた。これらの方々に心から謝意を表したい。

注

1）CFA フランは中部アフリカの旧フランス植民地で使用されている通貨で、1993年までは50CFA フランが1フランス・フランであったが、1994年からは100CFA フランが１フランス・フランとなった。現在は、ヨーロッパでのユーロ導入に伴い、655.957CFA フランが１ユーロとなっている。

2）Kitaishi（2000）は1993～1994年におけるバカの調査に基づいており、1999年および2000年の調査ではバカの食物分配における新たな変化が見られた。その一部は本稿でも取り上げるが、その詳細な分析は別稿に譲りたい。

3）答えた金額は人によってかなり異なるので幅を持たせた。また、ドンゴ村から北にほぼ150km に位置するベソン (Beson) 村において伐採会社の進出について聞き取りをおこなった。ここでは1997年まで伐採がおこなわれていた。バカも多数雇われており、ブルドーザーの番人や山刀でまっすぐ道を切り開く作業、チェーンソーで木を切り倒す作業、運転手の補助などをやっていたという。給料は月66,000CFA フランということであった。

4）私の調査期間は一年間すべてを網羅しておらず、カカオの収穫期はその走りの10月しか観察していない。そのため、カカオの収穫の作業については聞き取りと他の研究者の情報に基づいて分析するが、データが不十分であることは否めない。

5）ただし、酒は分配すべき物であるという彼らの考え方は特に若い人において少しずつ変化しているようである。私が雇っていた男性Ｃ氏は私から給料を前借りして２、３リットルの酒を購入した。酒を買ったときは、まわりにいる人ですべて飲んでしまうのが普通である。酒は分配すべき物とされており、また自分の小屋に酒を保管したとしても妻や他の人が勝手に酒を飲んでしまう。飲まれた人は怒るが、それを阻止することはできない。そこでＣ氏は一計を案じた。彼は私に買った酒を預かって欲しいと言ってきたのである。日本人の家に保管すれば他のバカが勝手に飲めないだろうと考えたのである。彼は彼自身と私、それに私のもとで働いていたもう一人の男性Ａ氏の３人だけで飲もうと考えていた。しかし、酒を購入した翌日の夕方、私の家で３人で酒を飲んでいると他の人が集まってき

て酒を分けざるをえなくなり、結局その場にいる人で全部飲んでしまった。酒を分配するかしないで済ますかの葛藤は今後とも続きそうである。

6）ある男性（故人）が支払った婚資のリストを見せてもらったことがあるが、それでは現金と渡した物を現金に換算した金額を合計して219,600CFAフランとなっていた。この額まで払うことは稀である上に、これまで払った金額を計算したり、記録をとったりすること自体が非常に珍しい。

7）他に鍋や皿、服なども夫は妻の親に与えることが多いが、正式な婚資として認識されているのはこの3つである。

8）バカは網を用いた狩猟をおこなっていないので、網はもともと持っていない。

9）分藤（私信）によれば、彼の調査地でも老人が大麻を見返りとして若いバカの男性に畑仕事をさせていると言う。その老人は、もう体力がないので仕事をしてもらっていると説明し、投資した額よりも多くの貨幣を手に入れようと意図しておこなっているのではないという。

10）道具の製作では数日間の労働の蓄積が必要な場合もある。しかし、バカの労働全体からするとわずかな部分に過ぎない。北アメリカ大陸北西岸やシベリア南東部に居住する狩猟採集民では食料を蓄積しながら数ヶ月を単位とした生活をおこなっている狩猟採集民が存在するが（テスタール，1982)、本稿では熱帯地域に居住する狩猟採集民のみを対象として考える。

11）短期間森のキャンプに滞在したときの印象ではあるが、森では村に比べて食物分配が盛んである。

12）木材伐採会社がドンゴ村にあった時期は雇われている人といない人の間で現在よりも大きな収入の差があったと思われる。

参考文献

Althabe, G. 1965. Changements sociaux chez les Pygmées Baka de l'Est-Cameroun. *Cahiers d'Etudes Africaines*, 20:561-592.

Bahuchet, S. 1985. *Les Pygmées Aka et la Forêt Centrafricaine*. Paris, SELAF.

Bahuchet, S. 1992. *Dans la Forêt d'Afrique Centrale: les Pygmées Aka et Baka*. Paris, SELAF.

Feit, H. A. 1991. Hunting territories, guaranteed incomes and the construction of social relations in James Bay Cree society. In (N. Peterson & T. Matsuyama eds.), *Cash, Commoditisation and Changing Foragers, Senri Ethnological Studies* 30:223-268.

Gomes, A. G. 1991. Commodification and social relations among Semai of Malaysia. In (N. Peterson & T. Matsuyama eds.), *Cash, Commoditisation and Changing Foragers, Senri Ethnological Studies* 30:163－197.

林耕次，2000.「カメルーン南東部バカ（Baka）の狩猟採集活動－その実態と今日的意義」『人間と文化』14：27－38.

Headland, T. N. & L. A. Reid 1989. Hunter-gatherers and their neighbors from prehistory to the present. *Current Anthropology* 30(1):43－66.

市川光雄，1991.「平等主義の進化史的考察」田中二郎・掛谷誠編『ヒトの自然誌』平凡社，pp.11－34.

Ichikawa, M. 1991. The impact of commoditisation on the Mbuti of Eastern Zaire. In (N.

Peterson & T. Matsuyama eds.), *Cash, Commoditisation and Changing Foragers, Senri Ethnological Studies* 30:135-162.

市川光雄，2002.「『地域』環境問題としての熱帯雨林破壊－中央アフリカ・カメルーンの例から－」『アジア・アフリカ地域研究』2: 292－305.

Joiris, D. V. 1993. Baka Pygmy hunting rituals in southern Cameroon: How to walk side by side with the elephant. *Civilisation*, 31(1-2):51-81.

北西功一，1997.「狩猟採集民アカにおける食物分配と居住集団」『アフリカ研究』51: 1－28.

北西功一，2001.「分配者としての所有者－狩猟採集民アカにおける食物分配」市川光雄・佐藤弘明編『講座生態人類学２　森と人の共存世界』京都大学学術出版会，pp.61－91.

Kitanishi, K. 2000. The Aka and Baka: Food sharing among two central African hunter-gatherer groups. In (G. W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda & N. Kishigami eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-gatherers, Senri Ethnological Studies* 53:149-169.

北西功一，2002.「中央アフリカ熱帯雨林の狩猟採集民バカにおけるバナナ栽培の受容」『山口大学教育学部研究論叢』52(1)：51－69.

北西功一，印刷中．「狩猟採集民バカにおける学校教育の導入－カメルーンドンゴ村の事例から－」『金田道和教授退官記念論文集』．

Leacock E. & R. Lee 1982. Introduction. In (E. Leacock & R. Lee eds.) *Politics and History in Band Societies.* Cambridge, Cambridge University Press: pp.1-20.

Murphy, R. F. & J. H. Steward 1956/1968. Tappers and trappers: parallel process in acculturation. Reprinted by Y. Cohen (ed.), *Man in Adaptation: the Cultural Present.* Chicago, Aldine: pp.216-233.

Peterson, N. 1991. Introduction: Cash, Commoditiation and Changing Foragers. In (N. Peterson & T. Matsuyama eds.) , *Cash, Commoditisation and Changing Foragers, Senri Ethnological Studies* 30:1-16.

Peterson, N. & T. Matsuyama (eds.) 1991. *Cash, Commodisation and Changing Foragers, Senri Ethnological Studies* 30.

寺嶋秀明，1996.「エフェ・ピグミーの女性と結婚制度」和田正平編『アフリカ女性の民族誌』明石書店，pp.27－53.

テスタール，A.，1982. *Les Chasseurs-Cueilleurs ou l'Origine des Inégalité.* (1995.『新不平等起源論』（山内昶　訳）法政大学出版局.)

Wenzel, G. W., G. Hovelsrud-Broda & N. Kishigami (eds.) 2000. *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-gatherers, Senri Ethnological Studies* 53.

Woodburn, J. 1982. Egalitarian societies. *Man(N. S.)* 17(3):431-451.